

略画テスト法を用いた住民意識調査の可能性に関する一考察

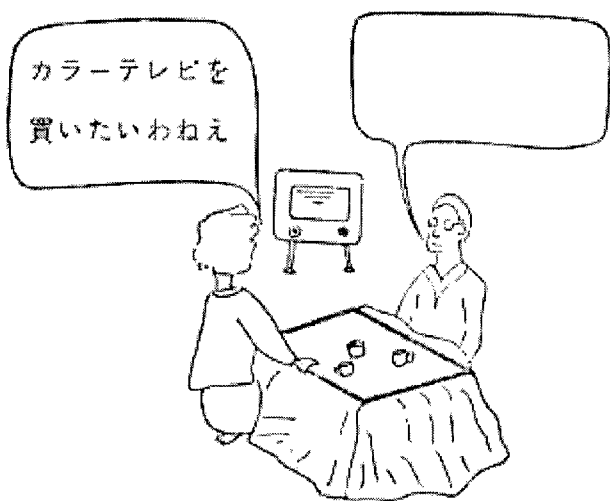
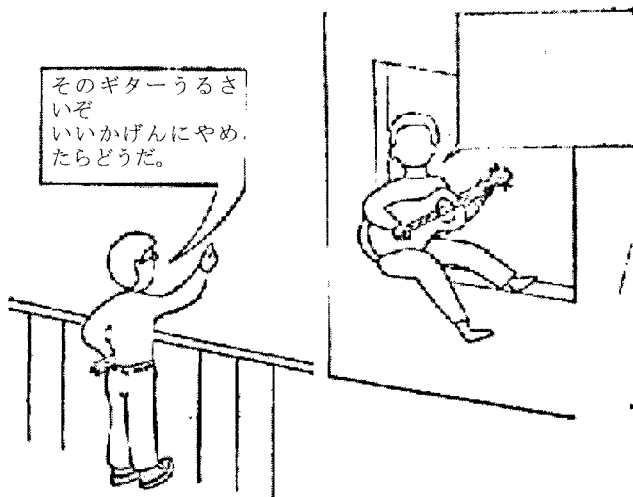
○ 愛知工業大学 正員 小池則満
愛知工業大学 正員 深井俊英

1. はじめに

近年、アンケートによる各種の住民意識調査が盛んに行われている。今後、住民参加の気運の高まりも受けて、こうしたアンケート調査の必要性は高まっていくものと思われる。その一方でアンケート調査においては、建前が前面に出て本音の部分が語られないことによる回答の信頼性が問題となることが指摘される。このような問題を解決する方法として、心理学から発展した投影法を意識調査に応用することが試みられている。本稿ではいくつかある投影法の手法の中から、略画テスト法と呼ばれる手法を取り上げ、その有効性について検討することを試みる。

2. 略画テスト法の概要

略画テスト法（ピクチャー・フラストレーション・テスト）とは、図-1¹⁾に示すように、人物画に空欄の吹き出しを用意し、この中になんらかの台詞を被験者に書き入れてもらうことで、意見を聴取する方法である。被験者が無意識のうちに画中の人物に自己を投影して回答をすることにより、深層にある本音の部分を引き出すことが期待できるとされている。心理テストとして実用化されているが、社会調査方法としてはあまり普及していない手法である。適用事例としては、難波らによる騒音に関する調査がある²⁾。ここでは、通常の質問形式では騒音に対して受容的な回答をした被験者群の一部が、図-2に示すような略画テストではきわめて攻撃的な反発をした事例が紹介されている。

図-1 略画テストの事例¹⁾図-2 騒音に関する調査への適用事例²⁾

3. 愛知工業大学オープンキャンパスにおける適用事例

愛知工業大学オープンキャンパスにおいて、来場者の意識調査を略画テスト法および多肢選択方式の二つを用いて愛知工業大学（以下、「愛工大」）に関するイメージ調査を行った。略画テストは2つのイラストが
A「愛工大って意外と（空白）だよね」

B「そうですね」

と会話している様子を示し、空白部分に何らかの単語をいれるレイアウトとした。アンケートは会場で配布、その場で記入回収する方法を取った。回収数は80部であった。

まず、略画テストへの記入率は85%と比較的高い値となった。これは略画テスト法がいわゆる「マンガ」と同じスタイルであることから、今回、被験者の中心となったオープンキャンパスの参加者(回答者の7割が高校生)には比較的なじみやすかったためと思われる。集計結果を表-1に示す。二つ以上の表現が記入されている場合は、分割して集計しているため回答数は若干多くなっているが、形容詞一語のみの回答がほとんどであった。これをみると非常に多様な表現を採取できることがわかる。その中でも「広い」のイメージが卓越しているほか、山、緑、田舎など愛工大の立地・周辺環境に対する印象が大きいことがわかる。同時に行った多肢選択方式による回答の一部を図-3、4に示す。この結果においても「広い」「田舎」というイメージが卓越しているほか、「広い」というイメージのほうが強くなっており、略画テストと同様の傾向が読み取れる。なお、略画テストにおいては、悪口雑言に類する回答もいくつか見受けられた。これは通常の自由記述方式では採取できない言葉であると考えられ、略画テスト法の特徴のひとつであると思われる。

表-1 略画テストによって採取された表現

回答数	76
大きい	2
広い	26
遠い	2
山	4
緑が多い	4
田舎	3
地味	2
しょぼい	1
きれい	4
楽しそう	3
ステキ	1
やさしい	2
設備が整っている	1
その他	9

以上の考察より、略画テスト法による意識調査は、自由記述方式と同様に幅広い意見を聴取できるとともに、比較的高い記入率を期待できる。また、多肢選択方式と同様の傾向を把握することも可能となるが、集計作業に手間がかかることなどが欠点であると思われる。

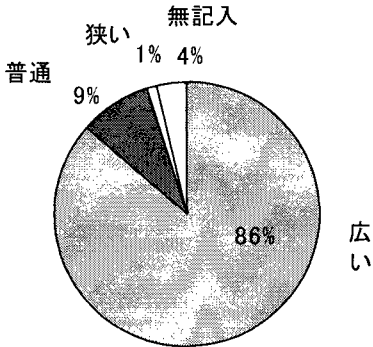


図-3 多肢選択形式による回答結果
(広い-普通-狭い)

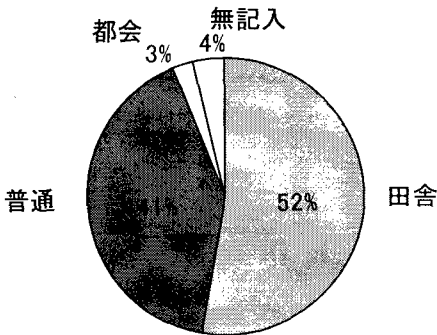


図-4 多肢選択形式による回答結果
(田舎-普通-都会)

4. おわりに

以上の結果より、略画テスト法は通常の方法との結果の整合性が見られる一方で、被験者の幅広い感想やイメージを聴取できることが明らかとなった。課題としては、今回の記入率が比較的高かったが、こうした高い記入率が一般的に期待できるのかどうか明らかにする必要がある。また、略画のデザインが回答へ及ぼす影響も明らかにする必要がある。今後は、よりさまざまな場面における適用を試み、略画テスト法を用いたアンケート調査の長所と短所を整理して、さまざまな住民意識調査手法の中における位置付けや社会基盤整備への活用方法について考えていく予定である。

(謝辞)

アンケートの実施にあたっては、愛知工業大学計画研究室の学生諸君の尽力によるところが大きい。また本稿の内容は、小池が委嘱されている(財)名古屋都市センター特別研究員として研究中のものであることを申し添える。

【参考文献】

- 1) 小原二郎; デザイン計画の調査・実験, 鳳山社, 1969.
- 2) 難波精一郎, 桑野園子, 中村敏枝, 加藤徹; 近隣騒音問題に関するアンケート調査, 日本音響学会誌, 31 (10), PP.592-599, 1978.